

精神病患者非特異性療法ノ總括 及ビ興味アル症例ニ就テ

金澤醫科大學精神病学教室(主任早尾教授)

専攻生 岡 部 保

Ho Okabe

(昭和12年10月11日受附)

抄 録

最近10年間ニ松原病院ニ於テ精神病患者ニ各種發熱療法ヲ施シ其ノ治療成績ニ就キ總括ヲ述ベタリ。

- 1) 「マラリア熱療法ニ於テ早發性癡呆24例中16例即チ66.6%, 痲痺性癡呆157例中95例即チ60.5%ノ寛解ヲ示シ, 躁病11例中8例ノ完全寛解ヲ見タリ。
- 2) 「ズルフロール熱療法ニ於テ早發性癡呆39例中17例即チ43.6%, 痲痺性癡呆42例中21例即チ50%ノ寛解ヲ示シ, 更ニ躁病8例中7例, 「ヒステリー症5例中全部完全寛解セリ。
- 3) 「ゴノワクチン熱療法ニ於テ早發性癡呆8例中4例, 痲痺性癡呆13例中8例即チ61.5%及ビ「ヒステリー症2例, 躁病1例ニ於テ寛解ヲ見タリ。
- 4) 「チフスワクチン熱療法ニ於テ痲痺性癡呆少數例ニ多少効果アルヲ認ム。
- 5) 熱療法ニヨリ或ハ偶發的ニ大寛解ヲ見タル興味アル腦微毒 (Jackson'sche Form), 癲癇, 「ヒステリー性バラノイヤ」及ビ幼若型痲痺性癡呆等ノ症例ニ就テ詳述セリ。

目 次

緒 言	第4節 腸チフス」合併ニ因ル偶發的 治癒
第1章 治療材料及ビ治療方法	第5節 「チフスワクチン」發熱療法及 同ワクチン」豫防接種ニ因ル 偶發的治癒例
第2章 治療成績ノ總括及ビ興味アル症 例	文 獻
第1節 「マラリア發熱療法	
第2節 「ズルフロール發熱療法	
第3節 「ゴノワクチン發熱療法	

緒 言

醫聖 Hippocrates 及ビ Galenus 兩氏ガ熱病ガ精神病治癒ニ効果ヲ示スコトヲ報ジテヨリ爾來腸チフス, 發疹チフス, 「コレラ」, 丹毒, 蜂窩織炎及ビ膿瘍等熱性疾患ノ併發ガ該疾患ノ治療上著効ヲ認メタル事實ハ屢々報告セラレ, 次デ Wagner von Jauregg 氏ハ「マラリア療法ヲ痲痺性癡呆患者ニ應用シ, Schroeder, 高瀬氏等ハ硫黃發熱療法ヲ, 鎌野氏ハ「ゴノワクチン發熱療法ヲ應用スルニ至リテヨリ之等ガ諸種ノ精神病患者治療上ニ追試セラレ現今

ニテハ相當効果アルコトハ一般ノ認ムル所ナリ。余モ亦「マラリア」、「ズルフロール」及ビ「ゴノワクチン」等各發熱療法ヲ早發性癡呆、麻痺性癡呆並ニ諸他ノ精神病患者ニ應用シ相當効果ノ存スルヲ認メ得タリ。

而シテ余ハ曩ニ最近約10年間ニ實施セシ此等非特異性療法ノ効果ニ就テハ既ニ種々ナル條件下ニ於ケル早發性癡呆及ビ麻痺性癡呆患者ノ血液像ト題シ、其ノ一部ニ就テ屢々報告セシ所ナルモ更ニ之ヲ簡單ニ總括シ報告スルハ無意義ナラズト考ヘ、且ツ特ニ興味アリト思考サレタル症例ヲモ併セテ記述シ諸賢ノ參考ニ供セントス。

第1章 治療材料及ビ治療方法

材料ハ昭和2年3月ヨリ昭和12年8月迄ニ松原病院在院中ノ種々ナル精神病患者ヲ選ビタリ。治療方法ハ既ニ數回述ベタル所ナルヲ以テ之レヲ省略セリ。

第2章 治療成績ノ總括及ビ興味アル症例

第1節 「マラリア發熱療法

本療法ヲ早發性癡呆及ビ麻痺性癡呆患者ニ應用シ、前者ハ24例中16例即チ66.6%、後者ハ157例中95例即チ60.5%ノ寛解率ヲ示シ共ニ著明ナル効果ヲ認メ、前者ニハ緊張病型ハ大寛解ヲ示ス傾向アリ、後者ニテハ遲鈍型ハ數ニ於テ最モ多ク寛解ヲ示シ、誇大妄想ノ比較的多キ病型、又ハ急性ナル病狀ヲ示スモノ、或ハ病症進行程度輕キモノハ治癒率大ナルヲ見タリ。他ニ躁病患者11例ニ之ヲ應用セシ所内8例ハ完全寛解シ、該疾患ニ對シテモ著効アルヲ認メ得タリ。

症例(1) 幼若型麻痺性癡呆症

患者名 宇〇ト〇子、16歳、♀、女學校3年生。

家族歴 實父ハ53歳ニシテ健存シ、性格ハ稍々短氣、寡言ノ方ナリ。飲酒常用2合、既往ニ於テ淋疾ヲ患フ。實母ハ46歳ニシテ健存シ、性格ハ配慮性ナリ。血液梅毒反應ハ中等度陽性ナリシト云フ。同胞ハ患者ノ他ニ4人アリ、1人ハ早産兒ニシテ3歳時虛弱死亡シ、1人ハ生後50日ニシテ死亡ス。他ノ2人ハ健存ス。

本人歴 性格ハ稍々小心、心配性ニシテ稍々短氣ナリ。又可ナリ神經過敏ノ方ナリ、特別ナル慣癖ヲ認メズ、稍々強情ニシテ物事ニ凝性ナリ。女學校在學中ノ成績殊ニ數學優秀ナリ。勉強ニ根氣強シ。

既往歴 生來比較的虛弱ニシテ歐氏管炎ヲ患ヒタルコトアリ。又2歳ノ時「コンジュローム」ヲ患フ。15歳ノ時「サルバルサン」注射數本施行セリ。他ニ疾患ナシ。

本病歴 昭和9年6月(約1年前)頃ヨリ言語障礙ノ存スルコトニ氣付キタル他記憶力ノ輕度減退及ビ稍々茫然トスルコトアリタリト云フ。昭和10年7月18日頃ヨリ急ニ多辯トナリ落着ナシ。言語ニ纏リヲ缺キ、理解ニ乏シク、我儘トナリ、屢々頭痛ヲ訴フ。又意識濁濁ス。

初診時症狀

身體のニハ體格榮養中等度ナリ。瞳孔ハ稍々小ニシテ、對光反應稍々減弱シ、調節反應普通ナリ。膝蓋腱反射稍々亢進ス。

精神のニハ顔貌ハ空虚性表情ヲ帶ビ、又屢々多幸性表情ヲ呈ス。睡眠稍々障礙セラル。又多辯ニシテ言

語ハ稍々蹉跌性ナリ。又領會力稍々悪シ。病識無シ。著シク落着ヲ缺ク。不柔順ナリ。錯亂狀態ヲ呈シ日、月、時間及ビ場所ニ關スル指南力甚ダ悪シ。

腦脊髄液検査所見 ワツセルマン氏反應⊕、村田氏反應⊕、マイニツケ氏反應⊕、細胞數87/3、パンデ一氏反應⊕、ノンネアベルト氏反應⊕、蛋白0.15%。

血液検査所見 ワツセルマン氏反應⊕、マイニツケ氏反應⊕、村田氏反應⊕。

本患者ハ昭和10年7月20日入院シ同年9月28日快癒ニ赴キ退院セリ。

入院後ノ經過及ビ處置 入院翌日「マラリア接種ス。7月28日ヨリ8月20日迄ニ正規ノ「マラリア熱發作約14回ニ及ベリ。熱發作最終回近クヨリ症狀著シク好轉シ、殊ニ熱發作停止後其ノ傾向ヲ示セリ。

發熱療法中ノ症狀

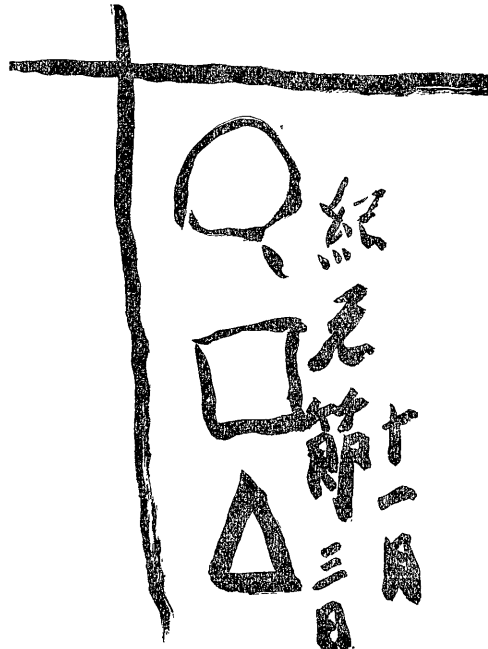
8月10日(熱發作8回直後)ノ病狀 入院當時ニ比シ著シク沈靜シ多辯ナラズ、錯亂狀態殆ソド停止ス。時日及ビ場所ニ關スル指南力ハ相當ニ恢復セシ感アリ。「何處ガ悪イカト問ヘバ「頭ガ疼メタ」ト答ヘ、多少病覺アル如シ。計算力ハ尙相當ニ減弱ヲ示ス、例ヘバ $7+6+9=44$ (不正)、 $7+6=13$ (正)、 $15 \times 3=25$ (不正)、 $93-39=(無返答)$ 等ノ如シ。次ニ記銘力及ビ記憶力ヲ觀ルニ「入院當時ノ狀況ハ覺エテキルカト問ヘバ「覺エテキル。ヒドイ目ニ會ツタ。泣イテ歩イタ」ト答フ。「當時頭ノ工合ハ如何ダツタカト問ヘバ「茫トシテキタ」ト答ヘ、「熱ガ出ルトヒドイカト問ヘバ「別ニ何トモナイガ悪寒ノスル時ハヒドイ」ト答フ。即チ漸次意識明瞭トナル傾向ヲ示シ病識モ出現セシ感アリ。又自己ノ年齢、生年月日及ビ父母ノ年齢、自己ノ學級年度、受持教師ノ名前モ正答シ得ル様ニナル。而シ品物ノ市價等ニ就テハ未ダ正當ナル判斷ガ出來ストカ、毎食ノ御馳走ノ名前等ヲ追想シ得ナイ場合ガ屢々認めラル。即チ未ダ記銘力、記憶力悪ク、僅ニ意識ノ濁濁及ビ領會ノ障礙ヲ思ハシムル點アルヲ認ム。瞳孔ノ對光反應ハ殆ソド異常ヲ認メザル程ニ恢復ス。「學校ノ方ハ氣ニナラヌカト問ヘバ「早ク行キタイ」ト答ヘ、全然無關心デモナイラシイ。「退屈カト問ヘバ「退屈デナイ」ト答ヘ、「氣ニ懸ルコトガアルカト問ヘバ「何ニモナイ」ト答ヘタル如ク稍々感情ノ鈍麻遺存スルヲ認ム。即チ稍々輕快ニ赴キツ、アルヲ示セリ。然レドモ手指振顫著シク書字ノ際ハ運筆甚ダ悪シ。

8月20日(熱發作14回直後)ノ病狀 漸次經過良好ニ赴キ、記憶力モ稍々恢復シ、指南力ハ殆ソド常態ニ復セシ感アリ。病識モ幾分存スル様ニナリ、「何處ガ悪クツタカト問ヘバ「頭デス、蛔蟲ガ居テ頭ガ悪クナツタノデス」ト答フ。然レドモ尙計算力悪ク稍々不管性ナリ。又僅ニ憤怒性ナルコトアリ。言語障礙ハ殆ソド全ク消失シ、失調、振顫等ハ著シク減少ス。

退院後ノ症狀 9月28日可ナリ良好ナル經

第1圖 幼若型麻痺性癡呆患者「マラリア發熱療法中(治癒前)ニ於ケル昭和10年8月10日ノ筆跡

(失調、震顫、誤謬等著明ナルヲ示シ、又○、□、△ハ1字畫記載ヲ命ゼシニ2字畫ニテ記スル等注意鈍麻ヲ示シ運筆甚ダ拙劣ナリ)



第2圖 同發熱療法中
(治癒前)ニ於ケル昭和
10年8月10日ノ筆跡
(失調、震顫、誤謬等アリ、
運筆甚ダ拙劣ナリ)

天力筋
八月十日
野波敏子

第3圖 同發熱療法施行後9日目
退院時ニ於ケル筆跡
(8月10日ノ筆跡ニ比シ失調、震顫等著シク
輕快セルヲ認ム。尙誤謬アリ運筆悪シ)

天力筋
二月三日

第4圖 該發熱療法ニヨリ大寛解
ヲ示セン同患者ノ退院後6ヶ月目
ニ於ケル筆跡 昭和11年3月28日
(失調、震顫、誤謬等殆ンド全ク消
失シ運筆著シク良好トナル)。

天長筋
三月二十八日
四月二十九日

過ヲ取り退院セリ。當時ハ手指ノ震顫殆ンド認めラズ只書字ノ際僅ニ痕跡ヲ留メ、尙幾分運筆悪ク又脱字誤謬ノ傾向アリ。其ノ後自宅ニテ靜養旁々外來通院シ加療ヲ持續ス。同年12月27日ニ於テハ更ニ著シキ恢復ヲ示シ、翌昭和11年3月28日ノ所見ハ稍々全治ニ近キ程度ノ大寛解ヲ示シ、家庭ニアリテ日常ニ近キ作業ヲ持續中ナリト云ハル。尙昭和12年8月2日(退院後約2ケ年後)付家族ノ通信ニヨレバ依然トシテ病症進行スル事ナク以前ヨリ更ニ健康トナリ、家事ノ手傳ヲナシ常ニ雜誌ナドヲ愛讀ス。然レドモ未ダ幾分ボンヤリシテキル様ナ時アリトノ報告ニ接セリ。

即チ本例ハ從來ヨリ一般ニ治癒困難トセラル、幼若型患者ニシテ斯ノ如キ大寛解ヲ見タルハ少カラズ興味アル症例ナリト考フ。

第2節 「ズルフロール發熱療法

昭和8年末ヨリ同11年末ニ至ル期間ニ於テ本療法ヲ早發性癡呆及ビ麻痺性癡呆患者ニ應用シ次ノ如キ治療成績ヲ得タリ。即チ前者ニ於テハ

21例中15例即チ71.4%ノ寛解率ヲ示シ、主トシテ輕寛解ニ屬セリ、而モ此ノ内5例ハ再發セ

シモノナルヲ以テ實際ニ於テハ寛解率47%ナリ。病症進行輕度ノモノ、感情鈍麻ノ輕度ナルカ或ハ之ヲ認メザルモノハ一般ニ寛解率大ナリ。更ニ昭和12年度ニ於テ18例ヲ追加シ前記21例ト合セテ合計39例ヲ治驗シ、内17例即チ43.6%ノ寛解ヲ示セリ。後者ニ於テハ27例中13例即チ48%ノ寛解ヲ見、内完全或ハ中等度寛解ハ割合ニ多シ。又前者ト同様病症進行輕度ナルモノハ一般ニ治癒率大ニシテ感情鈍麻ヲ遺スモノ少シ。更ニ昭和12年度ニ於テ15例ヲ追加治療シ、前回27例ト合セテ合計42例ヲ治驗シ、21例即チ50%ノ寛解ヲ示セリ。尙最近早發性癲呆患者ノ本療法ニ於テ新陳代謝機能ヲ促進セシムル爲ニ該注射後發熱時或解熱直後ニ「ゲネルモンエム」、「アンドロステン」(男性)、「オバホルモン」、「オキホルモン」(女性)、「カプホルモン」或ハ「ネオプシコリン」(男、女性)等ホルモン劑ノ併用ハ一層其ノ効果ヲ促進セシムル傾向アルコトヲ認メタリ。更ニ本療法ヲ躁病8例及ビ「ヒステリー症」5例ニ應用セシニ前者ハ7例、後者ハ全例ノ治癒ヲ示シ此等疾患ニ對シテモ亦著効ヲ認メ得タリ。又一般ニ亢奮時ニ於テハ之ガ應用ハ少カラズ沈靜ニ役立つモノナルコトヲ立證サレタリ。

症例(1) ジャクソン氏型癲癇ヲ有スル腦微毒

患者名 金〇〇三、♂、44歳、日稼人。

家族歴 實父ハ33歳時不明ナル疾患ニテ死亡ス。稍々短氣ノ方ナリ。實母ハ47歳時子宮癌ニテ死亡ス。心配性ナリ。母ノ祖父ハ至ツテ神經質ニシテ大酒家ナリ。母ノ祖母モ亦神經質ニシテ微毒ニテ死亡ス。同胞ハ患者ノ外ニ異父妹1人アリ。孿子1人アリ健存ス。他ニ遺傳トシテ特記スベキモノナシ。

本人歴 生來健康、18歳淋疾、19歳微毒ヲ患ヒ、14歳「ロイマチス」、約27年前脚氣ヲ患フ。11歳右鼠蹊部及ビ右腋窩部ノ淋巴腺炎ヲ患フ。42歳時某外科ニ於テ癲癇ノ診斷ノ下ニ頭部穿顱術ヲ行フ。屢々微毒ノ療法トシテハ「サルバルサン」注射並ニ水銀塗擦療法等施行セシモ殆ンド好結果ヲ認メ得ザリシト云フ。

本病歴 昭和6年1月中頃ヨリ癲癇發作ヲ起シ、意識消失、右半身ノ痙攣發作ヲ伴フ。最初ノ間ハ發作回數割合ニ少カリシモ次第ニ回數増加ノ傾向ヲ示シ、某大學內科ニ治療ヲ受ケタルモ根治スルニ至ラズ。又昭和6年7月頃某外科ニ於テ穿顱術ヲ行ヒタルモ發作ハ輕減サレズ甚ダシキハ20分間置ニ約10分間内外ノ輕發作頻發シ、3日間モ連續シ約100回ニモ及ビタル事アリ。發作後ハ頭痛ハナク、熟睡スル様ナコトモ少シ。只胸内苦悶ヲ訴ヘタルノミナリシト。昭和8年11月17日當院外來ヲ訪レ、同年12月10日ヨリ入院シ翌年1月31日快方ニ向ヒ退院セリ。

經 過

血液ハワツセルマン氏反應 \oplus 、村田氏反應 \oplus ナリ。

入院當時ノ症狀ハ體格榮養良好ニシテ瞳孔大サ並ニ反應普通ナリ。咽頭反射普通、視力普通ナリ。屢々複視ヲ見ルコトアリ。膝蓋髓反射ハ右特ニ亢進ス。脈ハ44ヲ算ヘ、大サハ中ニシテ軟、正ナリ。血壓ハ100ナリ。腹部皮膚反應缺餘ス、前微トシテハ右足ノ大趾ノ知覺鈍麻存スルコトアリ。Dynano-Meterニヨレバ右手ハ25、左手ハ39 Kgr。下腿ノ外側部、右足ノ大趾及ビ右膝外側部ノ知覺異常アリ、意識消失ト共ニ痙攣ハ右顔面及ビ右半身ニ限局ス。ロンベルグ氏微候輕度ニ認メラル。他ニ輕度ノ不眠アリ。左頭痛ヲ訴ヘ、言語滯滞シ、歩行障礙可ナリ著明ナリ。一面感情ハ刺激性ニシテ屢々興奮狀態ヲ示セリ。

治療 昭和8年12月13日ヨリ翌年1月20日迄熱療法トシテ「ズルフロール」注射10回施行ス。尙驅微療法トシテ「サルバルサン」或ハ「イマミコール」等ノ注射ヲ併用ス。

治療後ノ症狀 該療法後著シク快方ニ向ヒ、言語障礙、歩行障礙等著シク消退シ、膝蓋髓反射ハ尙右側

稍々亢進シ、右下肢が稍々知覺過敏ナリ、殊ニ足趾ニ於テ甚シ。膝蓋及ビ足趾痺レ感アリ。別ニ疼痛ナキモ電氣ニ掛カレル如キ或ハ針ニデモ刺ス様ナ異常感覺ヲ訴フ。又音又ニ對スル Vibrations-gefühl 右脚ニ於テ特ニ過敏ナリ。然レドモ治療進行ト共ニ漸次快方ニ向ヒ元氣恢復ス。痙攣發作、意識障礙興奮等ハ該療法施行後殆ンド消失シ、1月31日退院セリ。其ノ後約1ケ年間以上ニ亙リ良好ナル状態ヲ持續シ殆ンド全ク發作ヲ見ザリシ所、2ケ年後ニ於テ發作再發シ、其ノ後肺炎ヲ併發シ死亡セシ由ナリ。

全経過ヨリ觀レバ精神的ニハ最初ハ感情稍々刺戟性ニシテ記憶力稍々減弱ノ傾向アリ、我儘ニシテ屢々強度ノ睡眠障礙アリ怠惰性ナリシモ治療後ニ於テハ著シク恢復シ精神ノ異常ハ殆ンド之レヲ認メ得ザリキ。

即チ本例ニ於テハ驅癲療法ノ併用ハ勿論一面治癒ヲ促進セシムル上ニ大ナル役割ヲナスモノナルコトハ首肯シ得ラル、モ主トシテ「ズルフロール發熱療法ガ治療上ニ多大ノ効果ヲ齎セン事實ヲ窺知シ得ルモノナリ。

症例(2) 癲癇症(精神異常ヲ伴ヒタル)

患者名 松〇〇雄、♂、34歳、無職。

家族歴 實父ハ54歳飲酒常用1合ナリ。著シク短氣ナリ。實母ハ同年齡ニシテ溫順ナリ。同胞ハ患者ノ他ニ8人アリ、内3人ハ肺結核ニテ死亡シ、他ノ1人ハ生直後死亡ス。他ニ遺傳トシテ記スベキモノナシ。

本人歴 性格ハ小心、飽性アリ。微毒ヲ否定ス。28歳脚氣及ビ心臓病ヲ患フ。他ニ著患ヲ知ラズ。3歳時ヨリ屢々癲癇發作ヲ生ジ、昭和8年頃ヨリ痙攣發作稍々増加ス。又意識混濁ヲ來シ無斷外出スルコトアリ。感情ハ刺戟性トナリ屢々憤怒シ、自己ノ失業ハ兩親ノ爲ナリト考ヘ兩親ヲ恨ミ暴行ヲ敢テス。又邪推深ク、我儘トナル。昭和11年8月24日ヨリ上記主訴ノ下ニ入院ス。後「ルミナル」ノ服用以來約7ケ月間殆ンド全ク癲癇發作ヲ見ザリシ所、後再發シ、1ケ月ニ4-5回ノ發作ヲ見ルニ至ル。因ツテ昭和12年5月17日ヨリ6月25日迄ニ1週間約2回ノ割合ニ「ズルフロール」注射10回ヲ施行セリ。發熱療法中既ニ急速且ツ著明ニ發作回數ヲ減ジ、治療中僅ニ1回ノ發作ヲ見タルニ過ギズ、其ノ程度モ亦輕減セラル。

治療後ノ症状 更ニ著シク良好ナル経過ヲ取り引續キ今日ニ至ル迄發作全ク跡ヲ斷ツニ至レリ。又精神状態ヲ見ルニ別ニ亢奮状態並ニ意識ノ混濁等ヲ見ズ、暴行、憤怒性或ハ感情ノ刺戟性等著シク輕減セラレ、柔順トナリ、平常並ニ作業ヲ成シ得ルニ至リ、同年10月2日快方ニ向ヒ退院セリ。

即チ本例ハ「ズルフロール發熱療法」ヨツテ癲癇發作殆ンド沈靜サレタルト同時ニ癲癇性精神異常状態モ著シク恢復ニ赴キタル例ナリ。

症例 3) 妄想性幻聽ヲ主トスル「ヒステリー性」パラノイヤ

患者名 谷〇〇松、♂ 56歳、漁業。

家族歴 實父ハ外傷ノ爲死亡、飲酒常用1合半ナリシト。實母ハ73歳老衰死亡ス。長兄ハ36歳不明疾患ニテ死亡ス。他ニ遺傳ノ關係トシテ特記スベキモノナシ。

本人歴 15歳左股關節「ロイマチス」ヲ患ヒ、以來跛行ヲ呈ス。性格ハ小心、心配性ナリ。未婚ナリト。

本病歴 昭和8年1月初頃ヨリ憂鬱且ツ心配性トナリ幻聽ヲ主トス。例ヘバ「誰カ肩ノ上デ喋ツテイル」トカ「惡魔ガ自分ニ喋ラセルノダ」、「神様ガ野菜ヲ食ヘト自分ニオ告ゲガアツタ」ト云フ様ナ妄想ノ幻聽ヲ主トス。寡言ニシテ涕泣スルコト屢々ナリ。妄想ニ耽リ、落着ナク不安ナリ。獨語多シ。最近極度ニ宗教心ニ凝リ、夜中起床シテ佛壇ヲ開ケテオ參リシタリスル様ナ行爲アリ。其ノ他「人ガ術ヲ掛ケテ自分ヲ苦

シメル」ト云フ様ナ被害の妄想ヲ認メラル。多クハ不眠勝ニシテ病狀ニハ消長アリ、昭和8年3月30日當院ヲ訪レ即日入院シ、4月17日輕快退院シ、同年6月20日再入院、9月5日快方ニ向ヒ退院ス。昭和8年12月12日3度入院シ、翌年2月28日快方退院ス。

入院當時症狀 血液ハワツセルマン氏反應 \ominus ナリ。身體的ニ體格榮養普通ナリ。強度ノ痔疾ヲ有ス。咽頭反射缺除シ、角膜反射普通ナリ。瞳孔稍々縮小ノ傾向アリ。膝蓋髓反射稍減退ス。

本患者ノ毎回發病時ニ於ケル病狀ヲ見ルニ多クハ急速ニ發病シ病識アリ。鬱憂且ツ配慮性ニシテ被害妄想的の幻聽著シク不安並ニ苦悶狀態ヲ呈ス。患者ハ苦惱ノ爲メ自ラ進ンデ入院ヲ希望スルヲ常トス。不交際ニシテ物事ニ凝性、神經質ナリ。又猜疑心強シ。例ヘバ誹謗セラレテイル或ハ輕蔑セラレテイル等ト云フ。然レドモ意識ハ比較的明瞭ニシテ妄想的の幻聽ヲ主トシ憂愁或ハ苦惱、悲觀、慟哭ノ苦慮等ノ感情障礙甚ダシク時トシテハ厭世的トナル。又早く憑物ヲ除去シテクレト訴ヘルコト屢々ナリ。

原因トシテ考ヘラルルモノニハ患者ハ先ヅ小心、神經質ナル性格の基礎ノ上ニ左ノ股關節不具ニシテ跛行ナルコト、又其ノ他長ラク妻帯シ得ザル獨身ノ悲哀ト家庭上ノ不和、遠慮等種々錯雜シタ關係ガ誘因トナリタルモノナラズヤト考ヘラル。

經過 各入院時ニ毎回「ズルフロール發熱療法10回宛施行ス。患者ハ該注射ヲ絕對的ニ効果アルモノト信ジ極度ノ疼痛及ビ發熱ノ苦痛アルニモ拘ラズ自ラ進ンデ之ヲ受クルヲ常トス。治療ノ進ムニ從ツテ漸次妄想的の幻聽殆ンド消失シ、不安、苦惱等ハ一掃サレ、快方ニ向ヒ退院スルヲ常トセリ。然レドモ治癒後ニ於テハ患者ハ稍程度ノ性格の異常ヲ有ス。之ハ不具並ニ環境等ノシカラシムル所ノ後天性偏屈ニシテ又潔癖、偏見ヲ有スルコトハ止ムヲ得ザルコトナリ。

本患者ニ對スル「ズルフロール發熱療法ノ治癒機轉ニ關シテハ恐ラク發熱及ビ疼痛等ノ刺激ガ暗示的ニ作用シ治癒ニ赴ケルモノト思考サレ、甚ダ興味アル1例ト存ジ茲ニ報告セリ。

第3節 「ゴノワクチン發熱療法

本療法ヲ早發性癡呆患者ニ應用シ8例ノ内4例ノ寛解ヲ示シ、緊張病型ハ寛解大ナル傾向アリ。即チ例數少キモ相當ノ寛解アルヲ認メタリ。麻痺性癡呆患者13例ニ於テハ8例即チ61.5%ノ著明ナル寛解ヲ見而モ過半數ハ大寛解ナリ。即チ該療法ハ「マラリア發熱療法ノ代用トシテ或ハ亦「マラリア發熱誘發劑トシテモ使用セラレ可ナリノ効果アルコトヲ認メ、且ツ最近「ズルフロール發熱療法中熱ノ補足トシテ二次的ニ該療法ヲ併用シ効果アルヲ認メ得タリ。

尙「ヒステリー性疾患2例及ビ躁病1例ハ悉ク寛解シ殊ニ前者ニ於テ其ノ傾向大ナリ。

第4節 腸チフス」合併ニ因ル偶發的治癒

往時ヨリ「チフス」性疾患ノ合併ガ精神病患者ノ治癒ニ好結果ヲ齎スコトハ屢々報告セラレタル所ナリ。余ハ腸チフス」ノ合併ガ幼若型麻痺性癡呆患者ヲ治癒ニ導キタル1例ヲ認メタリ。又他ニ躁病患者ニ於テ同病ヲ併發シ治癒ヲ早メタリト思考サレタル2例ニ遭遇セリ。

症例(1) 幼若型麻痺性癡呆

患者名 清〇清、♂、21歳、無職。

家族歴 實父ハ63歳健存シ、性格ハ稍短氣ニシテ小心ナリ。實母ハ55歳虛弱ニシテ目下心臟病ヲ患フ。同胞ハ4人アリ、内2人ハ生直後不明疾患ニテ死亡ス。他ニ遺傳トシテ認ム可キモノナシ。

本人歴 生來至極健康ニシテ著患ナシ。性格ハ稍々小心，配慮性ナリ。又物事ニ凝ル方ナリ。學歷ハ商業學校卒業シ，成績普通ナリシト。

本病歴 實父ヨリ商業上叱責セラレタルコトガ誘因トナリシ様ニ云ハル。昭和3年12月31日突然倒レ，自覺的ニハ當時身體内ガ動く様ニ思ハレトカ，舌及ビロガ動かナイ様ニナリ水メト叫ビナガラ倒レタリシモ暫時ニシテ歩行ニ耐ル様ニナリタリト。次ノ日カラ頭部熱感ヲ覺エ，漸次精神異常ヲ呈シタリ。「色々ノ暗示ガアル」，「母ノ念佛ガーツ足ラヌカラ地獄ヘ行ク」トカ，「汝ノ生命ガモウ長イコトガナイ」，「女子ノ性欲ヲ注イデヤル」ト云フ様ナ暗示ガ起リ，胸内苦悶ヲ覺エタリ。又或時ハ女子ノ性欲ヲ透ス様ニ考ヘラレルコトモアリト述べ，又「汝ガ悪イコトガアツタカラ36億ヲ7倍ニシテ返シテヤルト云フコトヲ笠ヲ着ケタ旅僧ガ云ツタ」ト云フ様ナ被害妄想的言語多ク，秩序ナシ。又不眠勝トナリ，獨語多ク，寡言トナリ，問ニ答ヘザルコト屢々アリ。1ヶ所ニ長時間端坐或ハ起立不動ノ姿勢ヲ取り，或ハ横臥シテ終日起床セザルコトアリ。嫌人症アリ。記憶力モ減弱ス。注意力モ缺ケテ何處ト無ク無爲呆然タルコト多クナル。昭和4年1月22日某大學精神科ヲ訪レ，梅毒ノ診断ノ下ニ入院加療シ，3月4日未治退院ス。却ツテ幻想多クナリ病勢増悪セリト云ハル。同年3月7日ヨリ5月16日マデ東京某病院ニ入りテ「マラリア療法」，「リソゲル」注射療法等ヲ施セシガ治癒ニ至ラズ退院シ，同年5月17日當院ヘ入院セリ。

入院當時ノ症状 體格榮養良好ニシテ體温，脈搏普通ナリ。顔貌ハ空虚ナル表情ヲ呈シ，感情稍々鈍麻ノ傾向アリ。緘黙症，無返答アリテ殆ンド發語セザルコトアリ。軽度ノ常同症様行爲アリ。指南力，記憶力稍々減弱ノ傾向アリ。計算力，判斷力稍々悪シ。病識ナク，屢々獨語アリ。腸ト心臟ガ下ノ方ヘ下ツテシマツタ等ノ蒼古の念慮アリ。女子ノ姿ガ見エル等ノ妄想的幻視アリ。睡眠障碍ハ比較的軽度ナリ。應需運動活潑ナラズ。作嘴痙攣アリ。又頻發スル不自然ナル咀嚼運動アリ，爲ニ齒根馳緩ヲ訴フコトアリ。唾液ノ流出多ク，時々衝奇の上肢運動ヲ認ム。無意味ニ手ヲ握リシメ，就床ヲ常トシ，不管性ニシテ怠惰性ヲ帶ブ。別ニ退屈ヲ感ズルコトナシ。即チ緊張病様症状ヲ呈ス。瞳孔ハ大サ稍々小，對光反應稍々減弱ス。稍々軽度ノ近視ヲ有シ，角膜，咽頭，膝蓋髓各反射普通ナリ。

血液検査所見 ワツセルマン氏反應⊕。

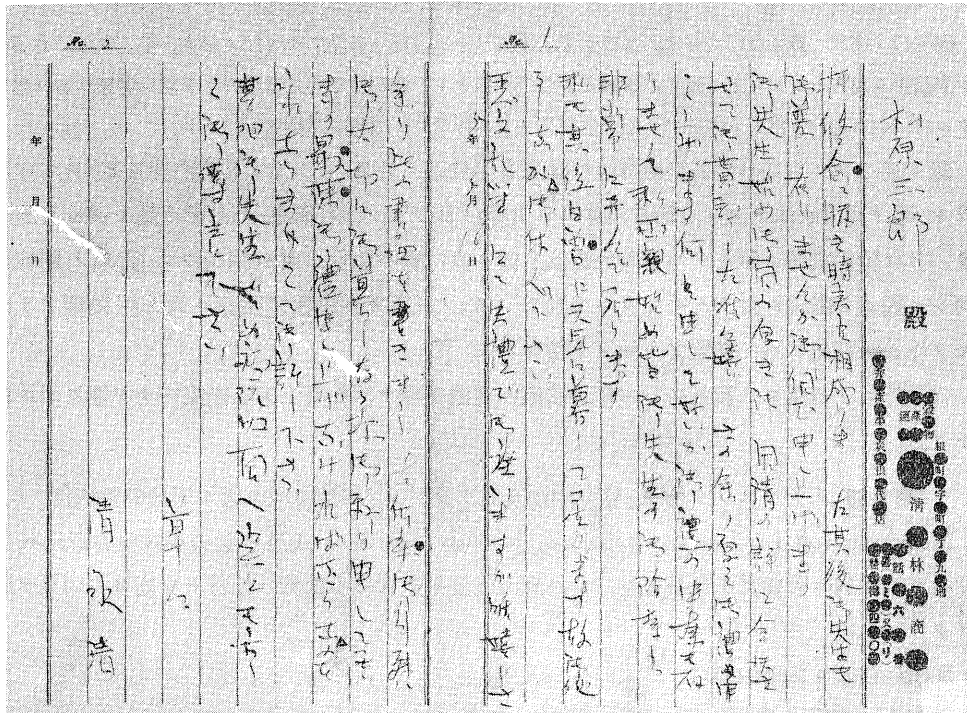
腦脊髄液検査所見 ワツセルマン氏反應⊕，バンデー氏反應⊕，ノンネアペルト氏反應⊕，細胞數45/3。

入院後ノ所見其ノ後患者ノ精神状態ハ餘リ消長ヲ認メズ殆ンド同様ナル状態ヲ續ケ，途中脚氣ヲ患ヒタルモ漸次治癒ニ趣ケリ。昭和5年1月20日頃ヨリ當市「チフス」流行時偶々同惡疫ニ侵サル所トナリ惡寒ヲ呈シ全身倦怠感甚ダシク，食慾不進トナリ舌ハ苔ナキモ乾燥ス，頭痛ト共ニ發熱シ37°4—37.5°Cヨリ漸次39°C位迄上昇ス。又脾臟ヲ觸知シ得，便秘シ，「ロゼオラ」多數認メラル。Widal氏反應200倍⊕凝集度ヲ示ス，因ツテ直チニ腸「チフス」ノ疑ヲ以テ1月27日隔離ス。血液及ビ尿糞媒養検査ノ結果共ニ「チフス菌」陽性ヲ示ス。發熱高度ヲ持續シタルハ發病後約2週間ニシテ其ノ後漸次散熱狀ニ下降ス。Widal氏反應ハ約1ヶ月半後凝集度3000倍⊕ニ増加ス。發病後2ヶ月目ニハ大小便3回連續検査ノ結果「チフス」菌全ク陰性トナリ腸「チフス」全治スルニ至レリ。

腸「チフス」經過中ノ症状 胃腸症状ノ他ニ精神症状トシテハ別ニ充奮ヲ認メズ，發熱中ハ譫妄，幻視，妄想等ナク割合ニ經過良好ヲ示シタリ。只僅ニ不眠ヲ訴ヘタルコトアリ。

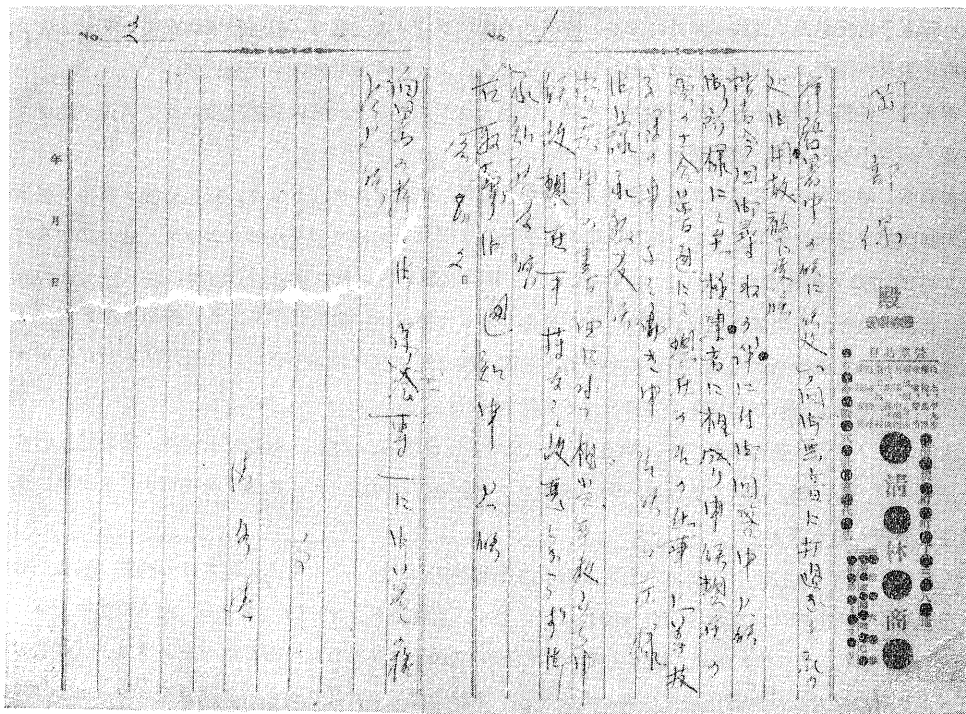
腸「チフス」治癒後ノ症状 著シク良好ナル經過ヲ示シ，意識明瞭トナリ，指南力，記憶力，計算力良好トナリ，無關心ナラズ。又顔貌症状普通トナリ，常同症様行爲，衝奇の行爲，不自然ナル咀嚼運動，唾液流出，作嘴痙攣，妄想的の考慮，幻視等ノ症状殆ンド消退サレ，退屈ヲ感ジ寧ロ仕事ヲ望ム様ニナリ，緘黙症ハ消失シ，種々理解アル會話ヲナシ得ル様ニナレリ。斯クシテ益々良好トナリ昭和5年4月7日寛解退

第5圖ノ1 陽チフス」罹患後治癒セン幼若型麻痺性癡呆患者ノ書翰



退院後約1ヶ月目昭和5年5月16日記(運筆餘リ勝レザルモ文内容ハ相當纏アリ簡單ニシテ要領ヲ得業務上差支ナキ程ノ知能ノ閃アルヲ認ム、只誤謬、脱字稍々多數認メラル) ●印ハ誤謬 △印ハ脱字

第5圖ノ2 同該患者ノ書翰



退院後約7年4ヶ月目昭和12年8月2日記(運筆餘リ勝レザルモ簡單ニシテ要ヲ得文内容ハ纏アリ、只僅ニ誤謬アレ共大體ニ於テ常態ニ近シ) ●印誤謬

院セリ。

退院後ノ症状 経過良好ニシテ歸郷後家事ノ手俣ヲナシ、別ニ異常ナルヲ認メ難ク、退院當年11月妻帯シ立派ナル商人トシテ家業ニ勵ミ、子供2人位アル由ナリ。昭和8年4月當院外來ヲ訪レ健康診断ヲ乞ヒタル時モ別ニ殆ンド常人ト差異アル如キ症状認メザル程度ニ、大寛解ヲ持續シ居レリ。

以上述ベタル所見ハ幼若型麻痺性癡呆患者ノ経過ニ於テ「マラリア發熱療法及「サルバルサン」等ノ驅微療法ニヨリ治癒シ得ザリシ所偶々腸チフス」ヲ罹患シ治癒ニ趣キタル1例ナリ。其ノ治癒旋轉ニ關シテハ藥物的療法ニ因ルカ、或ハ發熱、或ハ腸チフス」菌毒ノ刺戟ノ何レニ因ルカ斷言シ得ザルモ少クトモ腸チフス」ノ経過ガ本患者ノ治癒ニ大ナル効顯アリシモノトシテ特記スベキ價值アルモノト信ジタリ。

尙最近彼ノ音信ヨリ窺知スレバ精神狀態ハ普通ト變ラズ作業上何等差支ヘナク働キ居ル由ナリ。

第5節 「チフスワクチン」發熱療法及同ワクチン」豫防接種ニ因ル偶發的治癒例

Meninger von Lerchenthal, Stanojevic, Jennings, Besredica 氏及ビ當大學教室谷野氏ハ本注射ガ精神病ニ著効アルヲ報告シ、余ハ麻痺性癡呆患者極少數例ニ施行セン處多少効果ヲ認メタリ。

豫防接種ニ因ル偶發的治癒

症例(1) 癲癇(小發作)

患者名 山〇〇郎、 6, 18歳, 農業。

家族歴 實父ハ58歳至極健康、以前微毒ヲ罹患セシコトアリ、攝酒常用ニ合、性格ハ異常ヲ認メズ。實母ハ42歳子宮疾患及ビ腹膜炎ニテ死亡セリ。性格ニハ異常ヲ認メズ。父方ノ祖母稍々神經質ナリシト云フ。母方ノ祖父ハ溺死ス。同胞ハ患者ノ他ニ兄弟6人アリ、1人ハ4歳時癲癇ニテ死亡ス。

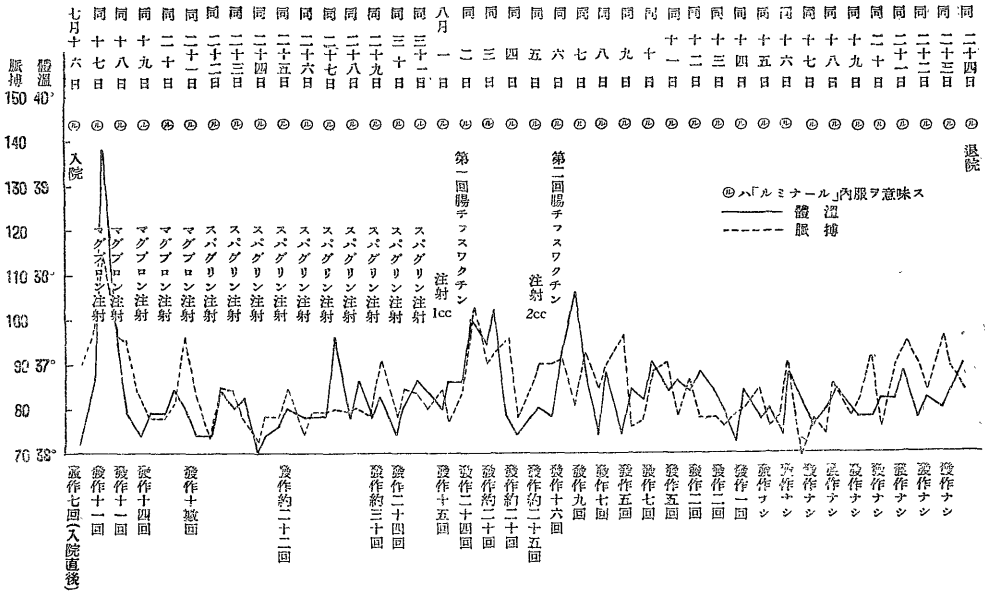
本人歴 性格ハ稍々小心、心配性ニシテ稍々惻憫ナラザルガ如シ。生來至極健康ニシテ著患ヲ知ラズ。學業ハ高等小學校卒業、成績普通ナリト云ハル。

本病歴 昭和6年7月頃ヨリ屢々癲癇ノ小發作ヲ起シ、羸弱ヲ伴フコト少ク、只短時間ノ意識ノ瀕瀕或ハ失神狀態ヲ呈セシコトアリト。昭和7年4月8日ヨリ當院ノ治療ヲ受ケ沈靜ヲ見タリ。昭和10年5月頃ヨリ再び同様ノ癲癇發作ヲ伴ヒ、屢々叫喚アリ、精神狀態モ稍々異常ヲ呈シ。憤怒ノ易ク屢々暴行ヲナス。着着ヲ缺キ、失笑多ク、或ハ夢中ニナツテ走り廻リ、涕泣シ、朦朧狀態トナル。前徴トシテ左ノ上ト肢或ハ上肢ノミ麻痺感ヲ生ズ。斯ル輕度ノ發作期間ハ極ク短ク且ツ頻發セラレ、1日10回ニ及ビタルコトアリ。上記主訴ノ下ニ昭和10年7月16日再び入院ス。

入院當時ノ症状 體格榮養良好、瞳孔ノ大サ及ビ各反應普通、角膜、咽頭反射普通、膝蓋陰反射消失シ、脈ハ64、小、軟、正ニシテ血壓ハ95、脈壓ナシ。病歴症狀ヲ認メズ。意識ノ瀕瀕可ナリ著シク、又刺戟症及與畜モ屢々認メラル。

入院後ノ経過 入院當日ニ於テハ入院直後小發作夥シク約7回ニ及ベリ。入院翌日ハ感冒ノ爲カ一時的ニ體温39.4°Cニ上昇ス。又發作回数増加シ11回ニ至ル。治療法トシテハ「ルミナール」劑ヲ内服セシメ、且ツ「マグブロン」、「スバグリン」(硫酸マグネシヤ製劑)ヲ16日ヨリ31日迄持續注射セシメタリ。入院後3日目ニ至リ解熱シタルモ尙發作減少スルニ至ラズ却ツテ發作増加シ、甚ダンキハ30回ニ及ビタルコトアリ。其ノ後8月1日ニ「スバグリン」注射ヲ停止シタル所發作回数稍々減ジタルモ尙依然トシテ15回ノ頻數ニ及

第 5 圖 山〇〇郎經過表



ビタリ。翌8月2日腸チフスワクチン」1cc(1cc中0.3mg)ヲ豫防接種ノ目的ヲ以テ注射シタル所直後ニ於テ24-25回ノ發作アリ。其ノ後稍々減少ノ傾向ヲ示シタリ。第2回2cc豫防接種後著シク漸減シ、9日目ニハ全ク消失シ爾後全ク發作ヲ認メズ。患者ノ實父ハ非常ニ歡喜シテ斯ノ如キ著明ナル効果ヲ示ス注射ナラバ更ニ續ケテ欲シト述ベタル程ニシテ8月24日全治退院セリ。

退院當時ノ症狀 精神症狀ハ入院當時ニ比シテ著明ナル寛解ヲ示シ、指南力ハ大體ニ於テ常人ニ近シ。即チ問、「何歳カ」答、「18歳」(正)、生年月日モ正答シ得タリ。又問、「今日ハ何月何日カ」答、「8月24日」(正)等ノ如シ。即チ意識ノ不明瞭ナリシ點モ著シク恢復サレタリ。

記憶力及ビ記憶力ヲ檢スルニ 父母及ビ兄弟ノ年齢ハ大體正答シ、入院月日モ正答セリ。問、「何日經過スルカ」答、「40日カ30日」(不正)。問、「7月ハ何日入院シテイタカ」答、「10日」(不正)。問、「學校ヲ卒ヘタノハ何歳ノ時カ」答、「8歳」(不正)。問、「當時ノ受持先生ノ名前ハ」答、「中」村敏雄」(正)等ノ如ク記憶力及ビ記憶力稍々障碍サル。

計算力ヲ檢スルニ 問、「23+32」答、「55」(正)。問、「83-38」返答ナシ。問、「55-16」答、「39」(正)。問、「11×11」答、「110」(不正)。問、「7+6+9」答、「22」(早正)。問、「8+5+6」答、「18」(不正)。即チ計算力ハ未ダ可ナリ減弱セリ。

睿智ヲ檢スルニ 問、「1ヶ月ハ何日カ」答、「大小アリ」。問、「7月ハ大カ小カ」返答ナシ。問、「紀元節ハ何月何日カ」答、「忘レタ」。問、「天長節ハ何月何日カ」答、「忘レタ」。問、「日露戰爭ハ」答、「明治37,8年」(正)。問、「日清戰爭ハ」答、「明治27,8年」(正)。問、「日獨戰爭ハ」答、「知ラヌ」。問、「陸軍記念日ハ」答、「5月27日」。問、「海軍記念日ハ」答、「3月10日」。後デ氣ガ付イテ「之ハ反對ダツタ」ト答ヘタリ。即チ睿智ハ稍々薄弱トナルモノナリ。

感情ヲ觀察スルニ 問、「病院ニ居ルト仕事ガナクテ樂デナイカ」答、「イヤ退院シタイ」(窮屈ダ)。問、「家ヘ歸ツテ何ヲスルカ」答、「畑ノ手傳ヲスル」等左程無關心トモ見エズ顔貌ハ稍々空虚性表情ヲ呈シ、不慣性ラシク見ユルモ入院當時ニ比シ。不機嫌症、刺戟症、憤怒性興奮等ハ著シク沈靜シ落着ヲ生ズ。即チ

感情ハ幾分鐘際ノ傾向アルモ著シク恢復セリ。

以上ノ所見及ビ治療後ノ経過等ヲ總括シテ觀ルニ本患者ハ以前ヨリ輕度ノ精神發育障礙ヲ有シ、即チ癡愚患者ニシテ癫痫ノ合併セルモノアリト診斷セリ。

治療経過ヨリ觀レバ「ルミナール」劑ヲ使用シタルハ今回即チ第2回目發病後ニ於テハ餘リ著効ヲ認メ得ズ、依リテ「スバグリン」、「マグブロン」等ノ硫酸マグネシヤ製劑注射ヲ連用セルニモ拘ラズ之レ又何ラ著効ヲ認メズ、却ツテ發作増加シ1日ニ30回ニ及ビタリ、然ルニ偶々「腸チフス」豫防接種ノ回規定ノ如ク施行セシニ注射ノ直後一時稍々發作回数ノ増加ヲ來シタルモ其ノ後ニ於テハ著シク發作回数及ビ其ノ程度漸減シ、9日目ニハ全ク消失スルニ至ル。即チ本例ニ於テハ「ルミナール」ガ餘リ効果ヲ現ハサザリシモノニアラザルカノ感アリ。又「スバグリン」、「マグブロン」等硫酸マグネシヤ製劑注射ハ却ツテ發作ノ頻發ヲ促進シ、「腸チフス」豫防接種ニヨル小ナル刺激ハ一時的ニ其ノ發作ヲ増加セシムル傾向ヲ見タルモ其ノ後ニ於テ比較的急速ナル減少ヲ來シタルコトハ主トシテ其ノ豫防接種ガ好影響ヲ與ヘタル所以ニアラザル哉ト考ヘラル。又退院當時ノ精神状態ヲ見ルニ稍々精神薄弱ニシテ指南力ハ僅ニ侵サレ、計算力、記憶力ハ稍々減弱セラル、點ハ元ヨリ從來ヨリノ精神薄弱ニ因ル所ナランモ、刺激症、憤怒、不機嫌症、其他亢奮状態ノ殆ンド沈靜ヲ見、意識清明ニ復シ、睡眠モ良好トナリ殆ンド本入ノ常態ニ近キ大覺解ヲ示シテ退院セシモノト云フ可シ。其ノ後數ヶ月後ニ於テハ更ニ著シク良好トナリ平日ノ如ク殆ンド作業能力ヲ恢復シ得タリト云フ。

文 獻

- 1) 梶尾重雄、主要精神疾患(癲癇性癡呆、早發性癡呆及躁鬱病)ノ軌跡ニ於ケル治療、第34回北陸醫學會別冊。
- 2) 同人、早發性癡呆癡治療ノ將來、內外治療、第10年、第11號、別冊。
- 3) 同人、神經症ニ精神癡界ニ於ケル「ホルモン」治療、治療及處方、192號、別冊。
- 4) 高瀬滿、硫黃療法ノ一般的應用特ニ癲癇性癡呆及ビ脊髓癆ニ應用ニ就テ、神經學雜誌、第37卷、第8號。
- 5) 梶尾重雄、癲癇性癡呆ノ「ゴノワクチン」療法、治療醫學、第9年、第11號、昭和7年、抜刷。
- 6) 久保喜代三、光信彦、治療及處方、第146號、別冊。
- 7) 東京帝國大學醫學部精神科醫局總務、癲癇性癡呆ノ「マラリア」療法、昭和7年。
- 8) 三嶋鑄一、精神病學提要、昭和7年。
- 9) H. Devinc; Recent advances in Psychiatry 1933.
- 10) Wile, U. J. and Hand, E. A.; Juvenile Dementia Paralytica, with Especial Reference to its Treatment with Malaria. The Journal of Nervous and Mental Disease, Vol. 83. 1935.
- 11) Nisenbaum, Ikeck; Malaria-therapie bei Schizophrenien. Zentralblatt für die ges. Neurologie und Psychiatrie. S. 348, Bd. 89, 1936.
- 12) 梶尾重雄、種々ナル條件下ニ於ケル早發性癡呆患者ノ血液像ニ就テ(其6, 8)、十全會雜誌、第42卷、第5, 7號。
- 13) 同人、早發性癡呆患者ノ「ズルフロール」發熱療法ニ於ケル所見、第1報、十全會雜誌、第42卷、第1號。
- 14) 同人、種々ナル條件下ニ於ケル癲癇性癡呆患者ノ血液像ニ就テ(其2, 3, 4)、十全會雜誌、第42卷、第6, 7號。